

ベップ・アート・マンス 2010 参加企画

「混浴 “学生” 世界～学生による、学生のためのフォーラム～」

3 日目「自治体文化政策」フロア議論

2010 年 11 月 5 日（金） 於 platform01（別府市元町 8-3）

#### 司会

石谷 絢（神戸大学大学院国際文化学研究科 博士前期課程<sup>1</sup>）

#### 発表者

佐口 史華（静岡文化芸術大学文化政策研究科 修士課程）

「まちづくりにとってのアートイベントの有効性について—市民ボランティアの視点から—

能松 保大（富山大学文化政策学部 4 年生）

「都道府県と市町村の自治体文化政策の役割を考える」

三浦 浩子（静岡文化芸術大学文化政策研究科 修士課程）

「伝統的工芸品産業の海外展開を支える政策」

#### 政策と表現の現場をどうつなぐか？

石谷：これまで、自治体あるいは政府の政策・仕組みについて発表していただきました。ここにおられる皆さんも、現場に入っておられる方もいますし、色々な活動をしている方がいると思います。それを踏まえて、政策—すなわち仕組みと、現場あるいは表現活動を、どうやってうまく関係づけてやっていけばいいのかということを考えています。漠然としていますが、自分自身、自治体文化政策を勉強していく中で、行政という切り口からではあるけれど、その間はずっと持ち続けていたいなと思います。そういう自分の思いもあってこのテーマにさせていただきましたのですが、皆さんはどう思われますか。感想からでもいいですし、今までの経験から似たようなことがあるとかでもいいですし、どうぞ。

じゃあどのくらいそれが使われてきているのかということに関心があります。この間、あるフォーラムで NPO 法人の方がおっしゃっていた印象的な話というのは、その時に NPO さんが言った印象的な話というのは、彼らとしては色々なことをやりたいということで、アーティストさんを支える側は何人かいるけれど、先生の熱意だけで動いている感じで、県からの補助はほとんどないと仰っていました。県から、一つ家を使っていいよと差し出されたんですが、それ以上のことはしてもらえなかった。それに、自治体がそこでイベントをします、お金を取りますと言ったときに問題が発生するんですよ。県が貸しているものだし、お金を取れば営業になってしまうので、それはだめだと。じゃあどうやって NPO を支えていくのか、という。

#### 自治体の文化条例は機能しているか？

佐口：能松さんの仰っていたことに関して、静岡でも同じような取り組みが実際なされていて。県にそういう条例があるんですが、

能松：文化の担い手っていうことを考えると、基本は民間ベースがまず前提にあると思うんですね。ただ、民間では支え切れない部分が出てきて、そこで行政がお金を出して支え

ていかねば、という現実があるわけなんですよね。そこで、県がやっているから市のお金が取れないとかいう場合もあったりする。文化のために協調して連携しなきゃいけないんだけど、お互いの、うちがやっているからみたいなので遠慮してしまう。でも本来文化政策というのは、文化の振興をするためにやらなきゃいけないんだけど、その視点ががっぽり抜けていて、うちからすれば理解できないような理屈で行政の人は色々言っちゃっている。まあもちろん、彼らもそれはおかしいと思っているんだけど、結局内部ががちがちになってしまっているから、色んな弊害もでてきている。

### ベースとして、文化の担い手は市民

確かに、行政の人が色々やらなきゃいけないというのがあるんですけど、一方で、じゃあ本当にやらなきゃいけないのかなという思いも、僕は実はあるんです。というのは、例えば、富山だと、「曳山」(ひきやま)というのがあるんですけど、それを維持するのは、それを持っている町の人たちなんですね。ところが、ある程度都市部の町でそれを持っているところは、住民がいるので支えられるんですけど、地方部に行くと高齢化が進んで若い人がいない。人口がどんどん減っていくという現実直面していて、要は住民がお金を出しあって山を維持していかなきゃいけないんだけど、維持できなくなっている現実があるんです。

そこで、住民は「行政からも支援を」と言うんですが、本来その町が始めた祭りなんです。だから、維持できないから助けてと言うのは、本来の姿なのかな？と。さっき「公共財」というキーワードが出てきたけど、確かにそれは公共財なんだけど、こっちを助けると全部公共財になってしまうから、とめどなくお金を投入しなきゃいけないってしてしまう。本当にそれでいいのかなと。だから、僕

の中ではあまり行政行政っていうのは言わないほうがいいよなと思いつつ、でも実際にお金を持っているところというのは、やっぱり行政だし、後世にも伝えていかなきゃいけない、残さなきゃいけないという考えからそういうことになってしまうのかなと思いつつも、それでいいのかなと常に考えています。民間が本来やっていたものが、民間が支えられなくなったから行政、というのは本末転倒ではないかと。

石谷：私もそれに近いことを思っていて、私はある自治体で文化政策審議会に出ているんですけど、そこに出ている方の発言を聞いていると、行政に何とかしてもらおうというか、何とかしてもらおうための陳情、じゃないんだけど、「物取り主義」みたいなことになる感じを受けます。私は学生としてただ客観的にみて、「いや、この審議会はあなたの利益を追求する場ではなくて、市民からの代表としてみんなのためにどうしたらいいかを考える場所なのでは」と思うときがあります。行政対市民、みたいな関係性がそもそもおかしいと思うんですよ。本当は行政なんて“one of them”で、一緒にやるなり、助けるなり、というのが本当なのに、何とかしてくれ行政、というのは市民の側もおかしい。何とかしてあげようという行政もおかしい。というのが、すごくよくわかりました。

東京大学の小林真理先生の研究室が、同じように学生が行政と共同研究をやっていて、そこは審議会に学生を投入するんです。あんまりよくわかっていないけど素直な学生が、「それはおかしいんじゃないですか」と私がさっき言ったようなことをやんわりと言うと、出ている人も「私は自分のことだけ考えていたのかな」と、凝り固まった価値観がほぐれることもある、と仰っていたんですね。今日、金沢 21 世紀美術館の話で、偉い工芸

家にアンケートを見せたらふっと気がつくっていう、あれだと思うんですよ<sup>2</sup>。そういうのって結構大事だなと思って。「行政 vs 市民」、「行政 vs アート」というのがどうにかならないものかと思います。

### と思いきや、政府から補助金がばら撒かれることも

能松：それはあるね。結局、「予算のぶんどり合戦」みたいになってしまう。利益団体とか、所属の組織としてそういうことを言う人がいて、富山県だと審議会とかで有識者として大学の先生が何人かいて、地元の文化団体の芸術文化協会、華道茶道書道とかなんだけど、それは各自、団体としてまとまりがあるわけじゃない。現代アートは多分ないという構成になっちゃうわけですね。彼らは自分たちの活動をもっと充実させたいと思うから、少しでもお金がくるように誘導するのは、ある意味仕方が無い。そこで大学の先生がいや違うよ、と諫めて、というパターンでやってきている。

でも一方で、やっぱりおかしいって思う時がある。僕もお茶とお花をやっているんですけど…麻生政権のときに景気対策でお金がばらまかれたことがあったんです。文化庁にもお金が入って、文化庁が伝統文化の人材育成みたいなので予算を付けたんですって。茶道とか華道の団体にお金をばらまいたみたいなんですけど、それで子供たちや一般の人向けに、初心者向けに何かやってよという感じで。でも、うちの先生はちょっと待ってよと。確かにありがたいけど、これで本当にいいの、と。そういうふうにする人も、ごく一部だけだよって。

橋本みなみ<sup>3</sup>：どういう意味で、お花の先生は「これはどうなの」と仰ったんですか。

能松：景気対策として、本当にそれをばらま

く必要があるのか、ということ。その名目で一応きているけど、それはほんとにこのお金を使ってやっていいのかと。直接関係ないよねと。麻生政権って、「国立メディア芸術総合センター」まで景気対策で作ろうとして…お釈迦になったけど。温めていたのだけど、急いで検討会を立ち上げたので、基本構想とかが全然できていなくて。結局頓挫しました。そういう経緯でばらまかれたお金なので、本来のお金の使い方としてどうなんだということですよ。

橋本み：コンセンサスが取れていないということですか。例えば、お花の側が「こういう目的で使いたいから」と言っていて、それに対して行政側は「こんなことに使ってほしい」と別の思いがあるという感じで、きちんとせめぎ合いがあって…というのではなくって、一方的に、名目的に政府が予算を付けてしまった。

能松：そうそう、お金があるから、とりあえずやってくれませんかという感じ。一方で、社会情勢で国家予算が厳しいときにそのばらまきって良いのかなと、市民感覚で疑問に思う。政権批判みたいな部分もあるかもしれないですけど。お金の使われ方として良いのか、ということですよ。やるぶんには良いんですよ。全く初めての人には。お花だったら、はさみとか購入してくれるんですよ。場所を、小学校とか公民館とかを借りるお金も出す。至れり尽くせりのお金。それを内々に、先生やってくれませんかというのが華道協会からあった。

富澤<sup>4</sup>：そのお花の教室では、何か取り組みをされたんですか。

能松：結局それはなくなりました。こういうお金がくるかもしれないので、先生これが

付いたらやりますかというのが協会から内々にあって、先生も別にやるぶんにはいいからやりますよと言ったんだけど、結局頓挫したんだよ。お金がおりなかった。民主党に代わったとか何とかで。補正予算だったかな、を止めてしまったからおりなかった。

### 補助金を一度やめてみては？

三浦：ちょっと前の朝日新聞だったと思うんですけど、企業メセナ協議会会長の福原さんと京都橘大学の金武先生が、補助金をやめてしまえ。やめてしまって、倒れる文化が出たらそれはそれでいいじゃないか。倒れると思ったら、市民が自ら支えると。そこで市民が支える文化こそ、本当に助けるべき文化なんだと。そういう「淘汰」を荒療法だけどやったらどうだ、っていうのを仰ってたんですけどね。私はあんまり乱暴だ、って思いましたけど、ただ、妙な延命治療をしているところを排除する方法としてやっぱりそういうショック療法って要るのかもしれないと思いました。

さっき私が申し上げた「ジャパンプラント育成支援事業」が支援している、ある伝統工芸品産地でもひどい話がありました。日本の伝統工芸の技を活用して世界に通用するブランドを立ち上げるっていう事業で、一年に一事業あたり 2,000 万円補助金がおりの話があったんです。それで一回支援事業として選ばれると 3 年間補助金が払われるので、総額で 6,000 万円付くんですよ。日本の伝統工芸品の中でその産地は非常に有名なので、出展しないと周りが許さないという話だったんです。だから、まず商工会議所が「やります」って手を挙げて、お金が取れそうな状況まで運んだんですね。それから職人さんたちに「補助金が付きますからやりませんか」と言ったら、その職人達は「そんなことやっていられる時間はないし、何をやるんだ？」って言って皆乗る気ではなかったんです。そう

いうのでも支援事業として選ばれたので 3 年間ブランド作りに取り組んで、結局その工芸品産地が頓挫したのは、当事者である事業者が商工会議所に言われたから参加した、というその受動的な態度にあったと思うんです。だから、「何で俺がニューヨークなんか行かなきゃならないんだ、こっちの仕事は誰がやってくれるんだよ」、と言う発言が職人から出て来てしまう。

この事例から分かるように、結局、補助金って実際にそれが本当に必要な人のところにいつているかと言うと、現実はそのようではない。そういう意味で、「目利き」をする、つまり本当に補助金が活きる場所を探り当てる目利きの仕組みが必要になる。それが難しければ、金武先生みたいに、一回全部スバッと補助金を辞めてしまってどれぐらいの文化が死ぬか見てやろう、とかね（笑）。一つの方法なのかなって、乱暴だけど、あの記事を読んで面白いと思いました。

### 芸術文化と経済合理性の兼ね合いは難しい —首長の文化的素養

那木<sup>5</sup>: 多様性の保持ということとは全く相対することかもしれないんですけど、普通に働いている人たちからしたら、稼げないんだったら作るなよ、というのが本音じゃないですか。もちろんそればかりとは思ってないんですけど、そこにはジレンマがみんなすごくあると思うんです。

aki<sup>6</sup>: 藤野先生もよく仰いますよね。マーケットとして成り立つものと、そうじゃなくて、例えば、誰も観ないけども、客席もガラガラで無駄な感じなんだけど、アヴァンギャルドなことをやっていて…でもそれも受け止める度量みたいなものも、文化のうちだから。そのバランス具合が、正解がどこという話ではないから、国が違ったら違いうだろうし、というようなお話で。藤野先生はよく某知事

を引き合いに出されているけど、あれをテーマにいつか授業でみんなディスカッションしよう、と言ったまま今まで来て、私は楽しみにしているんですが(笑)。

森内7: 関西以外の方はご存じないかもしれないですけど、大阪で大阪府の持っていたオーケストラが潰されるかもしれないというのが実際にあります。府営のオーケストラも、その他のオケも、今まで補助金が付いていたところをもうなくすと。そこで住民がそのオケを愛しているんだ、という署名活動をしていたりします。基本的に文化は経済合理性に則らない部分が多いので、マーケットメカニズムだけに任せているわけにはいかない部分もある。だから補助金なり国なりの必要なものとしての投資は絶対的に必要なんだけど、その一方でさっきの、やっている方は甘えていいんですか、行政にやってくれやってくれと言うだけでいいんですかと言うところのスタンスのせめぎ合いと、そして実際にお金の出せない自治体という問題と。

一つ私が思うのが、首長さんの文化教養度ということですよ。さっきの能松さんの発表もそうなんですけど、お題目がどんなにあったって、やらないところは多分やらない。お題目がなくなると、意欲のあるところは多分やると思うんです。さっき金沢のお話でしたが、私たちの4つの目標でしたか、これがバイブルなんです、行き詰まったときはこれに戻る、というふうに練り上げられて作られた条文なのかどうか。だから、条文論をやるのはむなしいなあと思いました。

例えばヨーロッパの首長になるような人は、いわゆる教養のある人じゃないと多分選ばれない。そういう文化的背景が日本にはどうして生まれ育たないんだろうと、というようなことを最近の問題意識として思っています。

あと、経済合理性についてです。今日の 21

美の話で一番心に引っかかったのは、「僕は直島では単年度黒字を出しました」、という話をされた一方で、21 美の話をなさったときには、「税金は投入して貰うべきものなんです」という話が出て、両極だなと思いました。私企業のやっているものとしては黒字を出さなければいけません、一方で、今やってらっしゃるところの話からしたら、お金は税金から出さなきゃいけないんだという思いと、両方があるって、どちらも、本音で言ってるなあと、面白いなあとお聞きしました。

### 文化の危機にこそ、市民の成熟度が問われる

三浦：その大阪府のオーケストラは、市民は署名以外に、俺が金だしてやるとか…

森内：なので、スポンサー探しを一生懸命やっています。大阪には今4つオーケストラがあって<sup>8</sup>、府の団体である大阪センチュリーというのが、大阪の名前をなくして「日本センチュリー交響楽団」という名前になるんですけど、元々大阪フィルハーモニー交響楽団という団体が企業とつながりが強いようなので、新たなスポンサー探しも難航していると聞きます。知事も、そもそも4つも必要あるんですかと発言したりして、結構もめるというようなことが、大阪では色々起こっています。

佐口：大阪の話もフォーラムのときに実際出てきて、大阪のセンチュリーは何が不十分だったかという、説明責任がしっかりできていなかったことが挙げられたんですよ。別のNPOさんから出てきたのは、私たちがやらなきゃいけないことは「成熟した市民をつくること」だという話でした。というのは、センチュリーが必要だって思う市民の意識があまりそちら側に向いていない。そういうことも、文化政策の土壌とかそういう話でも出ていましたが、重要なのかなと思いました。

### 成熟した市民を育てるには？

那木：例えばですけど、首長が芸術に対する意識がない、幼い頃に芸術体験をしていないから、バランス感覚がないという考え方があると思います。そこに至る、幼い時までの支援はしてくれるとか、そこまでで止める。そんな政策だったら、後々育って行くわけだから投資価値があるんじゃないかなと。

三浦：どうしたらいいのかな。一つは寄付控除を、税制改正を、という話があるんですけど、税制改正をして寄付控除をすごいやりますよって言っても、どれだけの人が、「じゃあセンチュリーにお金を寄付してあげよう」ってなるかということ、もう税制の問題じゃなくて、好きだと思うものは好きだっていう原体験みたいなものがないと結局は進まないだろうなあと思います。この場に来ているのはそういうのが好きな人たちだと思うんですけど、別府にしたってほとんどの市民は無関心なんですよ。無関心な人たちにお金を投入してもやる価値がありますよって感じさせるには、やっぱりものすごい長い時間をかけた、那木さんが仰ったようなことをやっていくのが、遠いようで近道なのかもしれません。

石谷：日本にはパトロネージっていう感覚がないじゃないですか。21 美の今日の話でも、子供たちと一緒に育って行こうというのはそれかなと。別に上の世代の人たちを諦めているわけじゃないけど、今から育って来る人たちを、育ってきたときに美術館を支えてくれる人にしようというのは多分そういうところなのかなあ。

那木：スポーツに関する政策にも、同じような課題があるんでしょうね。それと、お金の投入先に関して言えば、スポーツと文化、どっちに投入するのが正しいとは言えないで

すね。

石谷：スポーツもそうだけど、サッカーが好き人は野球の存在価値を否定はしないじゃないですか、多分。文化もそれが良いのかなと思っていて、みんなが文化を好きになる必要はないと思う。でも、あんなのにお金を入れる必要がないという拒否みたいなものがないのが、良いのかなと。別に自分は好きじゃないしそんなに興味はないけど、別にあいうのもあって良いんじゃない、みたいな人が育つのがいいのかなと思います。理想だけど。

那木：イメージだけど、実際は文化とスポーツの壁は高そう。スタジアムを作るくらいやったらコンサートホール作れやー！って言う人はいっぱいいるかもしれないですね。

三浦：やはり、投資する先は子供ですね。金沢 21 世紀美術館が巧かったのは、最初に小学生を全員無料で招待したんですよ。そして子供たちが家に帰って、「お父ちゃん、あそこプールがあってすごい面白かったよ！もう一回連れてって」、と子供が親を連れて行くという現象を一番最初に作ったんですよ。あれは本当に戦略として巧かったですよね。子供がまずファンになる。すると親は必ず付いて来る。あの図式。これからやるとしたら、もうそれしかないかも（笑）。

### 文化施設にはマーケティングが必要

那木：でもそれって結局、マーケティングとつか。商業的なにおいが…

一同：そうそう（苦笑）。

三浦：うん（笑）、でも優れていると思うんですよ。友の会も今やっておられるけど、それは民間で培われたマーケティング的な

ものですよ。うちの先生がよく仰るのは、アメリカで寄付がすごく集まるのは、それはもちろん税制のこともあるけど、これくらい寄付してくれたらうちの美術館でウェディングやってもいいですよとか、これくらい寄付してくれたらレセプションに招待しますよとか、これくらい寄付してくれたら貸切でいくらでも使ってもらっていいですよとか、ランク付けをして、それなりにお互いがウィン・ウィンになるようなシステムが工夫されているという背景があるのではないかと。もうちょっと、あざとい感じはするけど、文化事業といえども儲けるマーケティングというか方法を賢く考えないと、成り立たないのじゃないのかなあ。

能松：それは多分にありますよね。例えば、誰かが指定管理者になりました、と。けどひどいと思うのは、管理者なんだけど、館長は天下りだったり、というパターンが地方であるわけです。たいてい美術館とかでも、教育委員会からの天下りなんです。美術の先生だったらまだましなんだけど、算数の先生、理科の先生とかが天下って館長になるパターンがある。ひどいなって思うのは、指定管理者で運営交付金は減額していくのに、経営感覚のない人がそこに居座っちゃってるわけで、これは死ねって言うてるに等しいことだと僕は思うんですが、そういうことを行政は平気でやってしまうんですよ。本来は経営感覚がある人をもってきてしっかり回るような体制を作らなきゃいけないのに、人事権を絶対離そうとしない。これはものすごく問題。生かしたいのか殺したいのかどちらなの？という感じ（笑）。

まさにマーケティングを、本当はやらなきゃならないんですよ。お金が必要なんだから。一方で行政はお金を出してくれないわけで、自分が作って建てているのに、お金は出しません、とこれはひどいですよね。自分が必要

だと思って建てたのに、手を引いていって、どこかがいっぱい助成をとってきて、みたいな。都道府県や市町村は作っておしまいなのか、ということですよ。

森内：地方公務員の人で経営感覚っていうと難しいことが多いかもしれませんね。夏に、三浦さんの発表をお伺いしたときにも思ったんですけど、仕掛人が入ったところはうまくいっている。要はマーケティングができて、お金を引っ張って来る手段を知っている、海外に売る手段を知っている。マーケティングなり、売るための手法を持っている人が最大の切り札にならざるを得ないのかなと思うと、むなしさも感じると同時に、何かやろうとするんだったら経営感覚は持っていないといけないなあと思います。一方でこの三日間でも皆さん仰ってますように、手八丁口八丁やりつつ、夢や志を忘れずにいるということの、なんと難しいことかと。

### 目に見えない価値—外形としての文化／コミュニティとしての文化

能松：ちょっと話題が変わるんですけど、有効性とか効果を測定するっていうことも絡んでくるのかなあと思ってるんですが…9月に富山県の南砺（なんと）市に富山大の伊藤先生と、あと藤野先生も来て頂いたんですが、科研費でやっている研究の一環で、文化フォーラムっていうのがあって、南砺で文化の現状がどうなっているのかという、文化団体や行政の関係者が来てヒヤリング調査をやったんですよ。そのときに、世界遺産の合掌造りを…白川郷が有名なんですけど、その五箇山（ごかやま）は富山県に位置しているんです。その集落の近くに住んでいる方がいて、保全活動とか色々やっている方が来てたんですが、そこでの話がすごく衝撃的でした。

合掌造りの家を維持するのに、補助金が出ているんです。具体的に言えば屋根の葺き替

えです、茅葺きの。昔は「結」(ゆい)って  
いう住民の自治会とか連帯組織があっ  
て、お互いに協力してやっていた。自分の家  
の茅を替えるときは茅は自分で用意するの  
かな、周りの家は人手を出す。文化財にもな  
っているからということ、お金がおりるよ  
うになった。そしたらお金が入ることによ  
って、結の連帯がなくなった、ということ  
を仰ったんです。これは事実だそうで。形  
は残ったけれど、支える仕組みが、お金  
をつぎ込むことでなくなった。これは問  
題だねと先生たちの間ではなかったん  
だけど、一方行政は、「確かにその一面  
はあったかもしれない。でも、形は残  
りましたよね。お金を入れなかったら、  
形さえ残らなかったかもしれない。」現  
にそうなんです。住民の中は手放したり  
する人も居て、合掌造りがなくなって  
いっているという現状があったので、  
お金を入れなかったことでなくなる  
可能性もあった。お金を入れたから、  
合掌造りは残ったじゃないか、と仰  
ったんです。確かにそうなんです。

難しいのは、残ったけれどそれを支  
えるものがなくなったこと。どう考  
えればいいのかとずっと頭に残って  
たんですが、その形を生み出した  
コミュニティとか風土がなくなっ  
てしまうと、その形自体も生まれ  
ないわけですよ。文化政策の難  
しいところは、価値は残さな  
きゃいけないんだけど、目に  
見えないものをなくす危険性  
もあるということ。重い課題  
だと思っています。これ以外  
にもそういう事例はあると思  
うとぞっとします。

石谷：私もそれを聞いたんです。小林  
真理先生が富山に行ってまさに帰  
ってこられたときに聞いたん  
ですが、少し補足すると、なん  
でも補助金が入って結がなくな  
ったかという、補助金が入ると、  
その用途を明確にするだとか、  
経費を補助金を目的として出  
さないといけないことがあるん  
です。例えば、人件費に使った、  
材料費に使ったみたいな。で

も、結の活動に人件費や材料費  
なんて出さないじゃないですか。  
だから、結でやると補助金との  
整合性が合わないから、補助  
金をもらうなら結ではできない、  
だから業者に入ってもらって  
やらないといけない、材料は  
買わないといけない、という  
ことでそういう現状になった、  
ということだったと思います。

だから、何を以て「文化」と  
するかのことであります。文化  
って目に見えるものだけじゃ  
なくて、その周辺、それを作  
っている目に見えないもの  
みたいなものも文化ですよ。  
私は伊勢の方の出身なので、  
伊勢神宮があるんですけど、  
遷宮を20年に一回やって  
います。あそこはちょっと  
特殊で、神宮って天皇家と  
の関わりがあるので、文化  
遺産には多分ならないん  
ですよ、世界遺産みたいな  
ものには。天皇家の持ち物  
だから何とかとか。そうい  
う事情があるので、補助  
金ではなくやっぱり地元  
のお金だとか自治体のお  
金が出ているのかもしれ  
ません。

「式年遷宮」っていうの  
があるんですが、今にな  
っても新しく建物を建  
てるんですよ。20年に  
一回建て替えて、つぶ  
してっていう繰り返  
しをやっているん  
ですけど、今でも  
そのための材料を  
みんなで引っ張る  
というのをやると  
か、色んな行事を  
何年も何年もか  
けてやって、式  
年遷宮をやる  
というのはず  
うっと仕組み  
として残って  
います。だから  
建物は壊し  
ちゃうん  
ですよ。建  
物に価値  
があるん  
じゃなくて、  
そういう  
ずうっと  
みんなが  
続けて  
きたこと  
であり、  
儀式  
であり、  
式年遷  
宮って  
いう全  
体像が  
大事  
なので  
あって、  
別に  
今建  
てる  
神宮  
の建  
物が  
大事  
なん  
では  
ない  
ん  
です  
ね。そ  
れを  
間違  
えて  
いる  
とい  
うか。  
補助  
金の  
制度  
はそ  
こま  
では  
考  
えて  
いな  
い、  
とい  
うの  
が  
そも  
そも  
だめ  
なん  
だろ  
うな  
と思  
い  
な  
が  
ら  
聞  
いて  
いま  
した。

能松：これから  
そういう危険  
性もあるよ  
うなことで、  
やっていか  
ないといけ  
ないね。



石谷：その時に、なんで補助金をもらう側の地域の人にはそれを受け入れてしまったんだろうなあというのが疑問で。

能松：そこまで考えつかないんですよ、多分。お金をもらったほうが楽だし。でも、気づいたら、あれれ、という事態になってしまった。

橋本み：それまでは、お金や労働力を出すのが苦しくても、何とか自前でやっていたんですか。

能松：結って、そういうものだもん。やれなくてもやっていかなきゃいけない。これはすごくシビアで、強制なんですよ、コミュニティを維持するための。だからやっていた。

橋本み：それまでは、文化財には指定されていなかったんですか。

三浦：住む家として、生活の一部として、お互いに雨漏りとかしてきたら一人じゃできなから、みんなで助け合ってやろうねという、生活の共同作業だったはずですよ。

橋本み：じゃあ、指定されていなくても、近年まで持ちこたえてきたんですよ。

能松：もってきたんだけど、社会情勢の変化で若者は住まない、高齢化が進む、維持ができない、で年寄り二人しか住んでない、残したいんだけど莫大なお金がかかるし、じゃあ自分の息子に継がせたいかという、手放しますということになってしまう。それがここ80年、90年のことだそうで。

### 文化が政策によって定義される際のジレンマ

三浦：プロセスを一つの文化とすることは、

無形文化財にすることなんですね。そこにももう一つジレンマがあって、例えば輪島は、輪島塗という商品そのものは大臣指定の伝統的工芸品なんです。でもあそこは日本で唯一、輪島塗のプロセスが無形文化財になってしまっている。そうすると、輪島塗は何ぞやという定義が決まって、国内産の木材を使い、漆は一切人工的なものは無し、機械は一切使わなくて、刷毛はこのようなもので何回塗って、というのが全部決まっているんですね。それは、形だけ保存してしまうと、中抜きになって色んなものが輪島塗になってしまうので、このプロセスを無形文化財にしましょうということだった。

でも、それを決めたときから、科学や技術は進歩するし、日本の木はなくなるっていうことになる、輪島で作っておきながら、ちょっとだけ台湾産の木を使っているからって輪島塗にできない輪島塗が、輪島にいっぱい出て来るんですよ。買いに来た人は、「これ輪島塗ですか？」って聞いて、「輪島で塗って、職人が手作りで作っていますが大臣指定の輪島塗ではありません」と（笑）。「じゃあ輪島塗じゃないんだ」って、ものすごく混乱するんです。だから、プロセスを決めると、時代と合わなくなったときに自分たちの首を締めてしまうことになる。

那木：発展するということの、そもそもの文化の意味というのが難しい…

三浦：そうそう、そこも難しいところで。じゃあ古いものを捨てて新しいことにチャレンジするとそれは保存になるのかっていう問題も孕んでいて、なかなか難しい。伝統工法に意固地になっていると、若い職人たちはガチガチの世界に息苦しくなってしまう。今の時代にあんなピカピカの塗り物は誰もほしくないから、上塗り何回という指定があるけれど、僕は中塗りだけでちょっとマットな

感じのつやを出したい。それで職人組合に入れてくれないなら組合とは別にやる、という若い職人が増えているんですね。すると、同じ輪島で塗り物をやっているにもかかわらず、内部に反目が起こってしまっ、お客さんにも混乱が起こるし、輪島は産地としての一体感を失っていくという現象が起こる。

石谷：それもおかしいですよ。本来は仕組みのためにみんながやっているわけじゃないのに、本末転倒ですよ。臨機応変にいききたいところまで縛ってしまうのはちょっと違う気がします。

三浦：技を残したいというプロセスにこだわったが故にそうなっちゃったんですよ。

佐口：うちの地元のお祭りも国に指定された無形文化財なんです。田舎のお祭りなんです。夜の12時から始まって、神様が通るから、光があるみんなが見える時間帯じゃだめ。でも国に指定されたことによって、お客さんが来るようになって、本当は夜中じゅうやる祭りだったのが、交通法とかで夜の12時、1時過ぎまでというふうになって、本来の形でなくなってしまった。残さなきゃいけないはずなのに、国指定のせいで、と同じようなことが起こっているわけです。

那木：面白いなと思ったことがあって。アートの話となると、絵画とか、やれ巻物だとか、そこで何たらという話題が出て来るかと思ったら、「生活の中の何か」というのにみんな心を砕いているんだなあと。

能松：「文化振興」の難しさはきっとそこにあつて。芸術振興とは違って。

富澤：「ねぶた」か「祇園」か、ってどっちを保護するかなんてわからないですもんね。どっちを文化財指定するか、とか、評価のこ

とになると。

### これから文化を担うのは誰か？

橋本み：文化を残そうとしている人たち自身が、なぜそれがなくなったら困るのかということ、を、「なんでこんなことになっちゃったんだろう」という事態に陥る前に話し合うことが、大事じゃないかなと思います。話すことだけが大事だとは思わないけど、最初の段階として。

というのは、私も似た事例を新聞で知ったんです。祇園の山車のことだったと思うんですが。伝統的には、華やかできらびやかな山車を、決められた一定のコード内で作ることが求められているそうで…私は観たことがないんですが。昔から参加している同じ顔ぶれの団体は、そのコード内でいかにも山車らしい山車を作るんですが、美術部の高校生が少しくリエイティブな山車を作ったら、外からいわゆる「山車らしい山車」を期待してきたお客さんや、地元の伝統的な山車が好きな人に「その山車は祭りに出してほしくない」と言われたようで。それでも1年、2年やっただんですが、その後はだめだと言われてしまって祭りから排除された、という内容で。

でも記事は、これから山車を残していくのは、もう大人になってしまった人たちじゃなくて、その子たちじゃないですか。彼らが排除されちゃったら、じゃあ誰が残していくのかと。もし若者が、誰も残したくないということになったら、山車はなくなるけどもどうだろうか、と書いていて。それを読むと、やっぱり人も大事だと思って。一度なくなると、誰も復活させないだろうし…

那木：寂しいって言うてしまうとなんか抽象的だけど…寂しいよね。

### 文化すなわち残すべきもの、ではない

橋本み：形を少しずつ変えてしまっても、何

か伝統のようなものが残ることが人にとって大事なのか、あるいは、そのままの形を保って、そうじゃなくなったらもう伝統って言わないことにしよう、やめようって言うのかは、やっている人たちがそれぞれで考えたほうが、きっといい。それは、どっちが絶対的にいいとは言えないと思うんですよ。なくしたほうがいい、ということになってもしようがないと思う。その伝統の担い手でない人たちが、そんなことは良くないとか言うものではないなど。だから、伝統だから絶対的に残すべきというのは違うと思います。

那木：小さいレベルで…地方の分権ができていけば、小さいコミュニティでの話し合いが盛んになって、その単位で残す残さないという判断がそこでできて、差別化がうまくできるかもしれない。

能松：地方は高齢化が進んでいて、おじいちゃんたちだけで議論してもしょうがない。要は、担い手をどこに求めるのかということになってくるかと。本当はそうなる前に手を打たなきゃならなかったんだけど、ここまで高齢化が進んでしまうと手の打ちようがないですね。なくすか、すがるしかない、という分かれ道。

### 世代間での危機意識の差

aki：藻谷さんのお話にもあったように、ある程度ご高齢の方は、自分の時代の価値観…というカノリですよ、人口が増えていくイメージしかできないので、決めるという実感を多分持っていないと思う。だから、このままがいいのか、変わっても残ったほうがいいのか、このままじゃなくなるかもしれませんよというのを、真剣に問いかけても、「大丈夫だよ～(笑)」みたいな。それで最後に「助けてください、山車がなくなるんです」と陳情する、みたいなサイクルに入っていって

る現実があるのかな、という気はします。

能松：昔は時間が解決してくれたんですけど、今は時間とともに問題が悪化していく時代なんですね(笑)。

aki：暗い話になってしまうけど、今、めっちゃ山奥に住んでいて、高齢化していて、かなり過疎で、というところだと、ちょっとやばいなと思っている人も中にはいて、でも現実をみたくないし、見ずに済むんじゃないかみたいな気持ちがある(笑)。やばそうだけど、いけるかもみたいな。

その度合いが、個人差もあるけど年齢差によって色々で、50代くらいの人って地域でも一番若手なんですけど、確実に危機意識をもっていて、自治会の運営なんかにもかなりシビアで、自分たちのためって言いにくいから子どものためって言っているのもあるけど、予算の使い方に関して、このままでいくと今のことができなくなるって発言をされるんですよ。高齢化なので自治会に出て来るお年寄りも数は減っているんですけど、出て来る人は元気だから、昔のイメージでガンガンに言う人もいますが、そこで彼らを立てつつも、「いやでも実は～」みたいに言う人もいるにはいる。だから、そういう問いかけ自体が絶対成り立たないわけではないと思いますが、地方分権のほうが、そこに即して話し合っていけるのではないかと。

石谷：上からぼんと出すのではなくて、まずさっき橋本さんが言ったみたいに、そこの人たちでコンセンサスを形成するというか、価値判断をしてもらうプロセスが要るのかもしれないですね。そこから、仕組みに頼るなら仕組みに頼った方がいいのかもしれないし。

先ほど言及した集落では、良くも悪くも行政に対してのお上意識はすごく感じていま

す。ある意味、真面目なんですよ。文句を言いつつも、お上を尊重しようとされるので、行政が上から言うというものあるけれど。だから逆に、良い関係性を築けたら、ものすごく可能性があるんじゃないかなと思います。みんなが勝手に好きなことを言って成り立たないんじゃないかと、田舎はまだそういう意識が強いので、可能性があるんじゃないかなと。

### そもそも、政策に計画性がないのでは？

森内：だいたい、日本の政策は、プロセスを踏ませることが不得手な気がします。海外の事例を詳しく知っているわけではないんですが。お金を投入するけど今後どうするの、っていうことを組み立ててからお金を入れるということが本当は大切だと思います。地方自治体に就職される方は、是非そのようなプロセスを作ってください（笑）。

那木：トリエンナーレ、ビエンナーレというのも、そのプロセスが大事ですよ。コンセンサスとか。西欧のまねをして、文化のベースが違う西欧のを「良い見本だ」ってそのまま持って来るから、あれれってなる。憧れちゃったけど...と。

森内：佐口さんのお話を聞いていて思ったのが、今継続性などに対して否定的な見方をされているようにうかがいましたが、そこに至るプロセスというか、合意作りができた上でやるんだったら、そのこと自体は否定するものではないという気持ちもお持ちなのではないかと思うんです。企画者のそもそもの覚悟とか、意図とか、継続に向けての可能性とかが伴ってくれば、イベントとして悪いものじゃなくなるんじゃないかなと。インタビューとかすごく面白そうだなと思います。企画した側の方の意識を問うところが楽しみです。ボランティアの意識も。

### 自治体が文化・アートに期待する経済効果

那木：「アートで儲かるんじゃないか」って、それだけという可能性もありますよね。

三浦：今日もね、言っていましたけど、金儲けの手段になるって、行政は完璧に思っていますよ。そういうイベントをやれば儲かるんだって、今回の瀬戸内国際芸術祭でまさに助長されたと思いますよ。

橋本み：それが、全然儲かっていないんです、瀬戸内って。

三浦：経済効果のことね。船とか宿とか、行政はそこを考えるんですよ。単体が儲かることは彼らは眼中にはなくて、そういうものを含めて雇用を増やせば、フェリー会社で何人雇用が増えたとか、旅館で何人雇用が増えたとか、そういうのを全部数字に入れるんですよ。

### 地域ブランディングとしての文化・アート

富澤：あと、イメージですね。

石谷：これだけの人が来ました！って。

平井<sup>9</sup>：行政が、経済効果とかイメージを上げたいって言うのはそもそもなんでなのかなって考えると、市民がそうなってほしいって思っている、行政は代弁者としてというか。さっきの佐口さんが言っていた、価値というのをアートイベントに見出していかないといけないかというのが疑問で。それはもしかしたら、行政側が、市民がそれを求めているところを取り違えじゃないけど、市民が言うからお金を儲けなきゃいけないとか、イメージを上げないといけないと思っているけど、市民側としては本当にそんなことは思っているのかな、と疑問です。

富澤：市民が思っているから頑張ろう、という意識をもっている人がどれだけいるんでしょうか。例えば県としては、イメージが上がったら…みんなお金がないじゃないですか。どうにかしたい。イメージ戦略で観光客に来てもらったら、お金を落としてもらえないというのがあると思うし、違う自治体に、ここは頑張っているなと思ってもらえたら良いかもしれない、というのが例えば宮崎の某知事さんじゃないですか。あそこは、大成功ですよ。口蹄疫問題とかもあったけれど、イメージで成功した。宮崎の人も、意見は分かっていたけど、もう一期くらいやってほしいと言っていました。

#### 地域住民にとっての文化イベントの意義

那木：別府の例から言いますと、なんで文化イベントとかをするかという、住民が地域を誇りに感じる事が一番重要だと思うんです。その形を主催者側が取り違えているという可能性はあると思うんですが。この「BEPPU PROJECT」の良いなと思ったところは…大分県出身の私が感じる限りでは、大分県民であることに自信がなかった人たちがいっぱいいるんです、本当に。九州って基本的に田舎だし、関西に比べれば文化に接する時間が本当に少ないんですよ。田舎田舎ってみんなから言われて、すごく自信がなかった。誇りがなくなると、地域は衰退していく。そのサイクルを止めることができるイベントにはすごく意味があると思います。

三浦：その取り違えたところが何をするかというと、東京の広告会社を呼んできてイベントをやるけど、お金はみんな東京に行っちゃうんですよ。で、市民はかかわっていない。イベントが立ち上がって外からお客さんは来たけど、市民は冷ややかですよ。何か私たちのところでやってるけど…と。その危険性があるんですよ、儲かるとなったときに、

市民を入れてプロジェクトを立ち上げてっていうプロセスって、ものすごく面倒くさいでしょう。早く儲かりたいから業者呼んできてっていう、そのパターンに入ると危険なんですよ。

だけど、市民が立ち上がったという方が結果的に儲けがくっついてくるということを考えて行政がやれば、すごく良いものになると思うんですけど。辛抱しきれないでしょう、今の行政って。ものすごく大変だと思うんですよ。「混浴温泉世界シンポジウム」だって、相当前から準備しているわけでしょう。「オンパク<sup>10</sup>」も10年の下地があってやっとここまで来ている。それを行政が耐えられるかって言うと、自分の任期だっていつ終わるかわからない中では待ちきれない。

#### 文化担当者がどんどん変わってしまう…

aki：担当が変わるんですよ。私も今関わっているのが公共事業関係の人なので、担当が変わると色んなことの対応が変わってくるし、上の人が変わったら「私の聞いていた方針はそれじゃないんですけど!？」という変化があったりして、そういう意味で行政は継続性という点で難しいところがあるなと思って。でも同じ人がいればいいのかという問題もあるから、難しいかな。

三浦：そういうところこそ、法律とかね。

能松：継続性を担保するのが法律であり、計画であり、強制力であるはずなんですよ。

三浦：それが全く機能していないし、市民や県民にしたって、いつ誰がそんなもの作ったんだっていう。

森内：そこで、経済波及効果がいくらですか、そういうのばかりが前面に出てしまう。シンクタンク等には、やはり経済波及効果を

出してくれみたいな依頼はあって、それこそ例えば、タイガースが優勝した場合の経済効果の数字など、出すと喜ばれる。説得力はあるように見えるし、人も「儲かるのかあ」って思ってしまう。行政も、予算を付けるためにはこれだけ儲かりましたと提示する必要がある。そういうことだけに振り回されないようにするためにこそ、政策の強さとか行政の意志の強さというのがあってほしいと思います。

三浦：能松さんの研究の中に、例えば市の条例を作る時にどれだけ市民を巻き込めたのかというのが入れられると、良い論文になると思う。

### **市町村レベルと都道府県レベルでの文化政策の違い**

能松：(笑) ありがとうございます、頑張ります。あと、自治体文化政策の取り組みを見ていると、基礎自治体、市町村が頑張るべきと思っています。でもヒト・モノ・カネのリソースがあるのは、どうしても都道府県の方なんですよね。県なんですよね。県が担っている役割ってものすごく大きいなと思っていて、これが本当に良いのかというのも考えていかなきゃいけないけど、じゃあヒト・モノ・カネを市町村に移すためには、色んなことを変えなきゃいけないんですよね。あと、お金を上から下へ流すだけの補助金助成は本当にこれでいいのか、というのも思っています。これが一番無駄じゃないかなと。税金の制度も変えていかなきゃいけないと。

那木：仮説としては、こうしたら良いみたいなものはあるんですか。

能松：補完性の原理とかいうものを適用するとなると、徴税システム自体を変えていかなきゃならない。お金を吸い上げる力があるか

ら、市町村で「補完性の原理」とか「近接性の原理」って成り立つという背景があるんですが、日本はそれがなかなかできない。地方交付金でやっている。ちょっと前に住民税と所得税の割合が変わりましたが、それでもやっぱり少ないわけです。地方自治体の財源をもっと増やすのをやっていかないと、文化政策だけじゃなくて他の取り組みもよくなるのかなと。今日の藻谷さんのお話だと、地方交付金もう期待できないよねって(苦笑)。お話聞いていると、地方って絶望の時代に入っていくんだなあと…。

石谷：でもそうになると、さっきの結みたいなお金のかからない仕組みは持っておかないといけなかったんだ、って後でなるんじゃないですかね。

能松：本当にそうだと思う。想像を絶する時代ですよ。

森内：だから消費税議論が。

### **消える文化が出てくるのは、自然では？**

伊藤<sup>11</sup>：ちょっと前の議論をぶり返してしまいましたが、文化が廃れていくのも…いいっていうわけではないけど、今まで歴史を振り返ったら色々変わっていくんだから、手を出さなくてもいいんじゃないかなと思います。

aki：私、いますごく消えそうな業界にいます(笑)、伝統書道は残ると思うんですよ。文化財保護という観点で。博物館に入るようなものとして残ると思うんですよ。私が端っこで関わっているところがあるんですが、その中の一部の人は時代と会話してやっていこうとしたほうなんです。だけど、ざくっというと近代国家制度の溝みたいなのところに入ったので、良い時代…民間と会話で

きた時代は良かったんだけど、そうじゃなくなるときにものすごくしぼんだ。

私は、やりようはあると思っているんです。さっきの山車の話じゃないけど、高齢の方で、元気でばりばりに口の立つ先生もいるんですが、彼らは補助金とか行政とかって言うと思うんだけど、私はやりようによってもっと違う層の人が興味をもってくれたりとか、もっと違う可能性に発展したりとか、うちの業界だけじゃなくて、コラボとか相乗効果とか色々ありえると思っている。そこはチャレンジしてみたい気持ちはあるんです。

やってみたけど、私が思っていたのは全然幻想で何も反応がない、ということになったら、私ができるだけのことをして生きていけなくなったら、もうだめですと（笑）。終わるのも仕方がないかなんか思っているんですけど、やろうと思っただけでかかわっている立場としては、今日講師の方が誰か「覚悟をもって」と言ってらっしゃったけど、そういう気持ちはあって、かなりの力をそこに向けてやれるうちはやってみたいなと思います。ただ保護するものとして主張するのかということについては、微妙なところがあるよなあと。もうちょっと色々と考えたいなあとというのもあって、神戸大学の門を叩いたというのもあったんです。だから、文化だから保護すべきだとか、ずっと続けているから続いたほうがいいとか、数式みたいな、これイコールこれ、という方程式のようなものじゃないと思っています。

伊藤：自然にできたものが文化なのかなんか思ってしまうんだけどなあ…

### 何を文化とするかという問いに、その時々 自分の価値観が反映される

aki：でも、そうやって行政に文化政策がある、ということをして自然と言ってしまうんですかというのと、誰かが「文化」と決めて

いるわけじゃないですか。

三浦：誰かが決めているわけですよ。今伝統と言われているものも、革新の連続だから残ってきたんですよ。でもどこかの時点で、誰かがこれを「伝統」だと決めたんですよ。決めたのは誰か聞きたいですよ。

aki：すごく極端な例をあげると、北朝鮮の、大きな権限を持っているあの人が、「これを守るんだ！」ってそこで決めたから守るものとしてずっと続いているみたいなのは、自然と言っているのかなという話もある。極端な話ですよ、今のは。

あと、これはグローバリゼーションとかに関わると思うんだけど、「見えなくなる」ということはグローバリゼーションの中で起こっていることだと思うんですね。三浦さんも仰ったけど、良さがわかったり…今日、竹工芸の話もありましたね…ちゃんと情報を発信すれば、ああ！って価値に気づける人ってまだポテンシャルとしてすごくあるんだけど、色んな情報がガンガン入ってくる中で、そうやって落ち着いて何かをちゃんと、というスタンスが取りにくくなったから、見えにくくなってしまっただけ。

私は今すごくのんびりした世界に住んでいるので、あそこだとぼーっとしていても目に入るようなことが、見えなくなってしまう状況は、自然にそうなったといえそうなのかもしれないけど、人間の感覚としてはもっとポテンシャルはあるんだよと、思います。なので、外国に行ったら視点が変わるというのと同じで、何かふとしたきっかけで見方が変わったら、今必然と思っていたことがそうじゃなかったりするっていうのは無駄なことじゃないと思う。そういう機会があるほうが面白いと思います。そういう気で今はやっています。10年くらいしたら、違うことをやっているかもしれないけど（笑）。

## 文化が残るか残らないか、最後は運

伊藤：何があったら文化が変わっていくとか、百年後とかには、それも自然に起こったことって思われるかも…ぐるぐるぐるぐる回っていくというか。

aki：運。最後は運って私は思っていて（笑）。こうやって出会えることも、すごく努力しても会えない人には会えないし、足を運ぶことまではできても、例えば今日だってそういう巡り合わせってあるから、人的にできるところとできないことはあると思う。私は和歌山の方の古いお家ですごく屏風を見せてもらって…それは本当にご好意なんです。私が書道をしているというのをどこかで聞きつけて、見せてあげようと思って見せてくださった。明智光秀と一緒に逃げた人の書いた字が屏風仕立てになっていて。

三浦：個人蔵？

aki：うん。本当かどうかは知らないけども（笑）、その人は本当だと信じているし、ずっと蔵にあって、ちゃんとかびないようにして、その人だけじゃなくずうっとそうしていた。だから、私も嘘か本物かというより、その人がそう思って保管していることがすごいなと思って。ある意味アート作品ってそういうところがあるよなと。時代を経るみたいな。いいなと思う人がいたから、それだけ何百年と生き残ったわけで。運だな、と思ったり。

でも、こうやって会って話をしたりしているときに、生まれた感覚でその人が持っていたものがずっと残ったりということもあるかもしれないし、そういうおもしろさはいいなと思う。今日のシンポでも出ていたけど、「化学反応」的なおもしろさ。でもそういうのの捉え方って人それぞれなので、結局きっちりシンクロする人っていないと思うんで

す。それぞれ重なったり、接点すらなかったり。でも、この人とこの人は離れているんだけど、この人が真ん中に来たらなんとなくつながったりとか。というようなものかなと思って。なので、私がここに来たのは、ここに興味があって、接点を持っている人と出会えることもあるかなと、いうので来てみました。

平井：伊藤さんは、文化は自然にできてくるもので、それもわかるんだけど、文化って、文化っていうからそう考えてしまうけど、一回文化っていう枠を外して、自分にとって生きていく上で何が大切とか、どういう生き方がしたいとか、それって自分で求めていかないとできてこないことで。

昨日の話じゃないけど、アートっていうのは、橋本さんも言っていたけど、生きるツールだとか、絶対自分に必要なものというふうに文化とかアートとかを捉えたら、自然にできてきたというよりは、人が求めてそれを大切に思っていて、絶対必要だと思って尊重して、残されてきた。そういうふうに思ったら、その必要なものを必要だって思っている気持ちとか、必要だと思って活動している人の気持ちに気づくとか、思える環境を作らなければならないのが大きな意味で「文化行政」というものなのかなと思った。

## そこにあるもの、変わっていくものが文化

伊藤：私が文化は自然なものなのかなって言ったのは、ちょっと思っていることが違うかもしれないけど、私も文化って作られたものだと思うし、さっきも話していた通り、文化っていう概念自体明治以前はなかったわけで。それを文化だって決めたわけだから、お花とかお茶とかが大名の男性だけに限られていたものが、今は女性の文化みたいになっているのも、それも文化だと思うし、女性のたしなみって言われているものも文化だと思います。文化って、今できた文化も文化だし、



昔の文化も文化だし、身を任せても任せなくても、そこにあるものが文化なのかなって。

三浦：求めるものがあれば、必ずそこに何かが生まれるっていう意味ではそういうのもあると思うし、また変わっていくものだと思うんですね。それをある時期のこのかたちに留めねばならないっていうことに固執するから、だから今の伝統工芸品はそこで止まっちゃうんですよ。でも伝統工芸品だって昔はその時代の革新でしたからね。

伊藤：私は、それを止めるっていうことが不自然だと思う、っていう意味で文化は自然なものだと考えています。

三浦：それは自分たちで自分たちの首を絞めることになるよね。関係とともに、そこに求められているものが花開くと考えると、変わっていくものだよ。

伊藤：自然なものであるというより、自然なものであるべきというか。

### **文化は淘汰されて良いのか？—特殊なこの数百年**

富澤：言語文化も、文化だから、なくなっていくものもあるし。昔全部で 12,000 語あったものが、今は 6,800 語かな？で、そのうち 5,000 がネイティブの言葉で、それは保護しないとなくなっていくわけです。なくなっていてもそれは自然の成り行きだけど、それをじゃあ国立公園とか造って、君たちは他とのかかわりなくここで話さないっていうのは、また違う。でもなくなっていくし。

ドイツ語もなくなるって言われています。なぜかという、ドイツ語圏の人は英語を話せる。何十年か後にはドイツ語はなくなるって、藤野先生が仰っていました。フランス語は、フランスの人は国がそれを推すからなく

ならないだろうと。けど、それもまた全部が英語になってしまったら悲しい話で。というのはあるかなと。ジレンマですよ。6,800 から減らさないのがいいのか、本当に淘汰されてなくなってしまうのがいいのか。

橋本み：文化は淘汰されるべきではない、という価値観それ自体が重要だと思っています。それを守るためにも、ある人がある文化に固執してやる必要があるんじゃないかなと思って。それって、「多様性」を認めることじゃないですか。こういう文化もあっていいし、ああいう文化もあっていい。私たちが言っているような伝統文化や芸術文化であってもいいし、文化人類学的な文化、それこそ自然にできてきて、そうなっているような文化でもいいと思うし…1 人の人がいくつもの文化を担うっていうのは、人生の長さとかキャパシティとして、実質的にできないと思うけど。あれもあっていいし、これもあっていいというのが、文化の本質の一つかなと思います。

でも伊藤さんが、なぜ文化を意識的に、政策によって守らねばならないか、なぜ自然に任せてはいけないのかの答えの一つになっているかなと思うのは、効率化とか資本化があまりにも進んできたからだと思っています。私もあまり詳しくはわからないんですが、お金がものすごく大事な価値観になってしまったのって、本当にこの 200~300 年のことですよ。それまでは、これが大きい価値基準では全くなかった。本当に特殊な状況だということを私自身も忘れがちですが、だから何かを選ばないといけないわけです。これって決めたら、これ以外はもうお金が足りないからだめと言うしかなくなってきて。要するに、保護するにあたって文化の中の一つの方法やプロセス、期間とかを選ばないといけなくなってきた。それで違和感があるのかなと。そういう仕組みじゃなかったら、これ

て決めて保護しなくてもいいはずだから。そういう状況に陥ってしまった、というのが理由の一つかなと思います。

伊藤：確かに。さっきの明治時代の話に戻るけど、それは日本が西洋を、植民地の道か文明国の道かというところで選ばれて色々模索した結果だと思うし、その時代ごとに、乗り遅れないようにじゃないけど、合理的とか自分に一番いいように選んでいかないといけないのかなと、そういうところではいつの時代もそうなのかなと。今の時代だと資本にもついていかないといけないとか。明治だったら、文明をもたないといけないから、後半は文化をもたなきゃ変わったと思うけど…

### ここで、なぜ、今、文化を？

aki：そういうことだと思う。今日の円卓会議の最初に、芹沢さんが「今っていう時代観」みたいな話をされていたと思うんだけど、そういう時代の流れの中で文化とかアートとかが時代と会話しつつやってきた中で、「今という時代観の中でいったい僕たちがこれからどう関わるか」、っていうテーマをここでやってらっしゃるんだらうなあと思いました。私が興味をもってお聞きした中では、それが一番メッセージ性が強く出ているかなと。

三浦：ここで、なぜ、今っていうね。でも、これは吉本さんが仰っていた通り、必ず「揺り戻し」って来るから、極端に走り過ぎると、ロハスだとか農業回帰だとかの原点回帰が必ず起こる（笑）。世の中変わってきていますよ。高いけどいいものを買います、と。百元ショップもあるけど、何万でも、買う人は買う。極端なことをすると揺り戻しが起こるっていうことに、私はまだ救いがあると思います。そういう意味で、どっちつかずが一番

だめで、一回極端に走ってみろということですね。

石谷：そろそろここら辺で…。思いも寄らず、「文化とは何か」という本質的な議論に結局いけて良かったなと思います。昨日芹沢さんがメッセージとして残してくださった課題が、今日ちょっとだけですが、入り口くらいに着けたかなと思います。面白かったですね。みんなそれぞれ、現場や行政、色んな視点でやっているけど、こういう原点回帰というか、なんでだろうということを疑問をもって繰り返すことを、ここから帰ってもやめないようにしたいですね。そして定期的にこういう機会を持ちたいですね。来年は利賀でもやりましょう（笑）。近々、文化政策学会も神戸でありますし。学生フォーラムっていう機会じゃなくても、立ち話でもご飯食べながらでも何でもいいと思うので、習慣にしていきたいと思います。

- 
- 1 参加者の所属・肩書は、全て当時のものとする。
  - 2 美術館での展示に参加した大物工芸家は、はじめ展示に乗り気でなかったが、若い人が自らの作品を楽しく鑑賞した様子をアンケートに綴っているのを読んで、当初ほど悪い気はしなくなったという話。
  - 3 神戸大学国際文化学部 4年生。
  - 4 神戸大学国際文化学部 4年生。
  - 5 神戸大学国際文化学部卒業生。
  - 6 神戸大学大学院国際文化学研究科 聴講生。
  - 7 神戸大学大学院国際文化学研究科 聴講生。
  - 8 関西フィルハーモニー管弦楽団（大阪市）、大阪フィルハーモニー交響楽団（大阪市）、大阪交響楽団（堺市）、大阪センチュリー交響楽団（豊中市）。
  - 9 神戸大学国際文化学部 4年生。
  - 10 別府のNPOが牽引するプロジェクト「別府八湯温泉泊覧会」の愛称。
  - 11 立命館大学国際関係学部 4年生。